

# 故宮博物院収蔵の花蹊作品

跡見学園女子大学 文学部 人文学科 教授  
矢島 新

筆者と泉雅博先生、池上貞子先生の本学教員3名と、日本文化専攻所属の大学院生3名は、2017年3月23日から26日にかけて台湾を訪れ、到着当日の23日の午後に、故宮博物院に収蔵されている跡見花蹊作品を調査した。花蹊作品を収蔵している美術館や博物館は決して多くはないが、中国歴代王朝の至宝を収蔵する故宮博物院がその一つであることに、驚かれる方も多いだろう。収蔵されているのは「故画 清花蹊女史冊頁」という名称で登録されている画帖で、十二枚の花鳥画が貼り込まれたものである。「故画」とは、皇帝への献上品としてかつて北京の故宮に所蔵されていたものを言う。

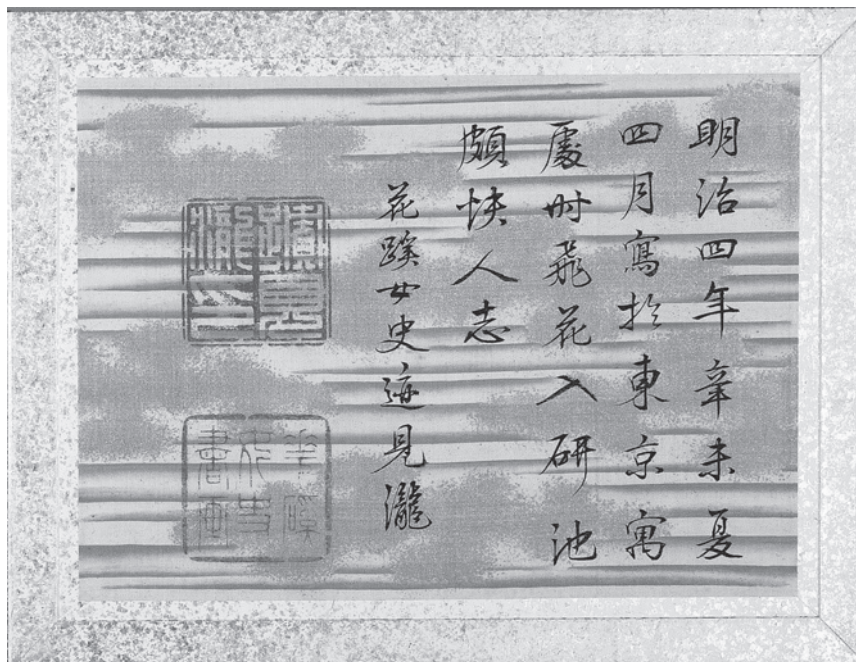
この画帖が清国皇帝に献上されるに至った経緯は、泉先生が『花蹊日記』などの検討から明らかにされている（註）。それによると、この画帖は外務省の依頼に応じて制作され、外務省が時の同治帝に献上したものであるという。明治四年（1871）3月8日の日記に「外務省よりノ画帖ニカナル」と記されているのがこの作品であるらしい。画帖末尾の「自識」には、「明治四年辛未夏／四月寫於東京寓／處時飛花入研池／頗快人志／花蹊女史迹見瀧」とあり、この記述が裏付けられる。

花蹊は明治四年には数えて32歳という若さであり、発足間もない新政府の外交に使われる大切な絵画の描き手に選ばれたのは、異例の抜擢というべきであろう。清国皇帝への献上品ということであれば、中国画風の、当時の言葉で言えば唐絵風が求められたであろうが、幕府お抱えだった狩野派に頼むわけにもいかない。花蹊は前年に東京に転居したばかりであったが、京都で写実で秀でる円山派に学んだ腕の確かさが、新政府高官の目に留まったのだろう。

作品を仔細に観察したところ、花卉や葉に極細の輪郭線を引いたり、一筆でグラデーションを描く円山派のお家芸である付け立ての技法を用いたり、鳥の羽に細かな毛描きを施すなど、様々な技法を駆使していることが見て取れた。画業の初期に位置する作品ではあるが、代表作の一つと評してよいだろう。

（註）泉雅博・植田恭代・大塚博共著『跡見花蹊』（ミネルヴァ書房、2018年3月）の第二章「幕末・維新の動乱のもとで」第3節「新都東京へ」を参照

「自識」



故宮博物院蔵

「花卉翎毛」



故宮博物院藏

「山雀」



故宮博物院藏